

籠の渡シ六ヶ所在、凡此川、中島村邊より中宮村まで、道程七八里の間、西岸不殘巖石屏風を立たるごとくにて、川幅僅に依て四五十間に過ざれども、四時不案内の者、歩渡成ざる川なり。

〔増補地名便覽名所〕籠渡

白山の中宮にあり

〔撰集抄七〕敵有男山伏笈中入助事

おなじころ承治こしの方へ修行し侍りしに略申かごの渡りに、今すこしゆきつかで、山のきはに僧一人、おとこ一人侍り。略申此山伏の笈の中に、此人○男をかくし入て、ふたりうちともなひて道を過侍るに、太刀はき弓持たるおのこども、十餘人あつまりて、過つるかたに、玄かぐの男や侍りつるとたづね侍りしに、此山伏いさゝかもさはがす、さる人はんべりき、此わたりをせんとありつるが、敵の侍とかやつぐる人侍りとて、又越後へとてこそ、おもむき侍りしかといふ事を聞いて、こは打にがしけるぞや、又いざおはんとて、馬にのり、ぶちをうつて、はせ過にけり、扱かれはからくして命をたすかりて、越中國につき侍りぬ。

〔夫木和歌抄渡二十六〕かごのわたり

いたづらにやすく過ぎぬ山ぶしのかごのわたりもあればあるよに

〔金槐和歌集戀〕戀のうた

我戀はかごのわたりの綱手なはたゆたふ心やむ時もなし

〔國花萬葉記十一〕陸奥とづなの橋
名景は、つなばしのよしよめり、

〔千載和歌集十二〕百首歌奉りける時、戀の歌とてよめる、

みちのくのとづなのはしにくるつなたえずも人にいひ渡るかな

衣笠内大臣

前參議親隆

〔夫木和歌集橋二十一〕家集とづなのはし